

介讀の文章

「一」

人にも物にも 会社にも 名前がある

今の若い人の名前が ぶしや

おしやれすぞと その字がぶしやんことか

ある

世間の名前が○○子と 子太ついでに付る

もつと着た おわね おみつし おゆきと

おみつし たり

社名も 「子」の限を 印刷しては ころは

あつた 奥が たいと考へた

地城を 表す 自然の 木や草の 名も

見かけ

名前が 苦味して

考へて つけられた

昨日の 新会社は 福祉の 街 という

その 前日 あり

その 前日の あり

皆の 名前を つけて

内各社 子一ミレ分 通りは 川

名前を付する こと 必要

内容が 万が一 名前の 地味 どの

大きな 美しい 紙を つかい

やたら 宣伝する こと 厚い

資本金 0.0と 言われて いる

会社の 内容が どの 程度 どの 程度 どの 程度

それ どの 程度 どの 程度 どの 程度

言われて いる こと

心算の せいで 大印 どの 程度

2023
8/26